

内務省期における農政実務官僚のネットワーク形成

誌名	農村研究
ISSN	03888533
著者名	友田,清彦
発行元	東京農業大学農業経済学会
巻/号	104号
巻号補足	
掲載ページ	p. 13-26
発行年月	2007年3月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



内務省期における農政実務官僚のネットワーク形成

友 田 清 彦*

要約：近代日本における勸農政策の本格的な展開は、明治6年（1873）11月における内務省の創設、および明治7年（1874）年1月における同省勸業寮の設置をもって開始される。内務省期における勸農政策展開の担い手となった農政実務官僚のうち、最上層部を形成する官僚の多くは、明治4年（1871）から同6年（1873）にかけて行われた岩倉使節団の米欧回覧、および明治6年に開催されたオーストリアのウィーン万国博覧会に直接関係を有する人々であった。岩山敬義、田中芳男、佐々木長淳、池田謙蔵、関沢明清、前田正名、井上省三などであり、彼らの人的なネットワークこそが、内務省期における勸農政策展開の推進力となったのである。本稿では、彼ら内務省の農政実務官僚に焦点をあて、初代内務卿であった大久保利通を中核とした人的なネットワークがどのように形成されていったのかについて明らかにした。

キーワード：明治農政、農政実務官僚、岩倉使節団、ウィーン万国博覧会

I. はじめに

明治新政府による勸農政策は、明治6年（1873）11月の内務省創設、翌7年1月における同省勸業寮の設置をまけて、はじめて本格的かつ系統的に展開される。内務省期における勸農政策展開の大きな契機となったのは、岩倉使節団の米欧回覧、およびこれとほぼ同時期に行われたウィーン万国博覧会への明治政府の参加である。内務省勸業寮（のち勸農局）の中で、最上層部を形成する農政実務官僚の多くが、岩倉使節団およびウィーン万国博覧会に直接関係を有する人々であったことについては、すでに拙稿（友田，2002c）で検証したことがあるが、本稿では彼ら農政実務官僚のネットワークがどのようにして形成されたのかについて、より深く検討してみたい¹⁾。

II. 内務省勸業寮の農政実務官僚

さて、内務省期における農政実務官僚のネットワークとは何であろうか。この時期における勸農政策展開の基本方向は、一つは輸入防遏と輸出振興であり、二つには原野開墾と泰西農法の導入で

あった。そして、これらの政策目的を実現するために必要な諸施策として、農政担当機関、農業団体（農会）、農業教育機関（農学校）、農業試験場、農業博覧会（博覧会・共進会）などが創設・整備されていった。これらの施策を実現していく担い手となったのが、内務省を創設し、自ら初代内務卿となった大久保利通を頂点とする農政実務官僚たちであり、そのネットワークである。図1はこのネットワークを、民間の人々・機関・団体をも含めて概念化し、図示したものである。実際の相互関係はきわめて複雑であるが、ここであえて大胆に簡略化してみた。なお、彼らが具体的にどのような形で勸農政策の展開を担っていったのかについては次稿に譲る。

大久保利通を頂点とする農政実務官僚のネットワークの中で、中核的な位置を占めるのは、岩山敬義、田中芳男、佐々木長淳、関沢明清らである。表1には、明治7年（1874）から9年までの勸業寮における主要な職員、および参考として明治10年（1877）の勸農局職員を示した。勸業寮筆頭で内務大丞を兼ねていた河瀬秀治は、のちに商務を勸商局に移した際に勸商局長に転任している。また大鳥圭介は工学頭という工業部門の責任者なの

*東京農業大学国際食料情報学部

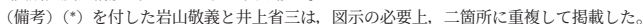


表 1 内務省勸業寮の職員

明治 7 年 (1874)		明治 8 年 (1875)		明治 9 年 (1876)		明治 10 年 (1877)	
内務卿参議	大久保利通	内務卿参議	大久保利通	内務卿参議	大久保利通	内務卿参議	大久保利通
〔勸業寮〕		〔勸業寮〕		〔勸業寮〕		〔勸農局〕	
頭		頭		頭		局長	松方 正義
権頭兼内務大丞	河瀬 秀治	権頭兼内務大丞	河瀬 秀治	権頭	河瀬 秀治	少書記官	岩山 敬義
助	古谷 簡一	助		助			橋本 正人
		四等出仕	大鳥 圭介	四等出仕	大鳥 圭介		佐々木長淳
		五等出仕	田中 芳男	五等出仕	田中 芳男	一等属	速水 堅曹
権助	岩山 直樹	権助	岩山 敬義	権助	岩山 敬義		門馬 崇経
六等出仕	田中 芳男	六等出仕	山高 信離	六等出仕	山高 信離	三等属	高畠 千畝
			塩田 真		塩田 真		山中 福永
			関沢 明清		関沢 明清		岡 毅
七等出仕	佐々木長淳	七等出仕	佐々木長淳		佐々木長淳		山田 令行
	富田 冬三		富田 冬三	七等出仕	富田 冬三		池田 謙蔵
	青山 純		青山 純		青山 純		岡野 朝治
			鈴木 利享		鈴木 利享		平野 榮
			武田 昌次		武田 昌次		大槻 吉直
			橋本 正人		橋本 正人		奥 青輔
			杉山 一成		杉山 一成	五等属	鳴門 義民
大属	鈴木 利享	大属	尾高 惇忠	大属	尾高 惇忠		織田 完之
	尾高 惇忠		服部五十二		服部五十二		後藤 達三
	服部五十二		門馬 崇経		門馬 崇経		舟木 真
	門馬 崇経		川村 清輔		川村 清輔		多田 元吉
			大森 惟中		大森 惟中	御用掛准奏任	人見 寧
八等出仕	武田 昌次						前田 正名
		九等出仕	速水 堅曹	九等出仕	速水 堅曹		関沢 明清
中属	鳴門 義民	中属	鳴門 義民	中属	鳴門 義民	〔勸商局〕	
			織田 完之		織田 完之	長 大書記官	河瀬 秀治
		十等出仕	後藤 達三		池田 謙蔵	少書記官	富田 冬三
			奥 青輔	十等出仕	後藤 達三		
権中属	織田 完之				奥 青輔	〔博物局〕	
		十一等出仕	池田 謙蔵		多田 元吉	権大書記官	田中 芳男
十二等出仕	舟木 真	十二等出仕	舟木 真	十二等出仕	舟木 真	〔内国勸業博覧会事務局〕	
						事務取扱御用掛	山高 信離

(出所) 各年の『官員録』より作成。

(備考) 1) 河瀬秀治は明治 9 年は内務省大丞、大鳥圭介は明治 8・9 年とも工学権頭兼製作頭、田中芳男は明治 7・8 年は内務省五等出仕、明治 9 年は内務省権大丞が本務、明治 10 年の松方正義は大蔵大輔兼地租改正局三等出仕。

2) 明治 7～9 年については大属までは全員を、実線以下については一部だけを掲載した。明治 10 年についても三等属までについては全員、実線以下については一部だけを掲載し、また二重の実線以下で、明治 9 年まで勸業寮で名前の挙がっておりながら勸農局には所属しなかった人物の一部について、参考までにその所属を示した。

で、農業・水産部門担当者の中では、岩山、田中、関沢、佐々木などが、一貫して重要な位置を占めていたことが看取できる。

Ⅲ. 農政実務官僚たちの欧米体験

岩倉使節団関係者およびウィーン万国博覧会関係者のうち、本稿の主題に直接関係する人々（ゴ

チックで表記）を中心にまとめたのが表 2 および表 3 である。見られるように岩山敬義と杉山一成が岩倉使節団の大蔵省理事官および大蔵省理事官随同行、山高信離が澳国博覧会書記官、それ以外の 5 人が澳国博覧会事務官である。

「明治辛未十一月十日（陽暦では明治 4 年〔1871〕12 月 21 日）に起り、六年九月十三日（陽暦）に止

表2 岩倉使節および理事官等メンバー(一部)

使節団職名	官名	氏名	出身・年齢	参考
(出発時)				
特命全権大使	右大臣	岩倉 具視	公家 47	
特命全権副使	参議	木戸 孝允	長州 39	
同	大蔵卿	大久保利通	薩摩 42	
同	工部大輔	伊藤 博文	長州 31	
同	外務少輔	山口 尚芳	肥前 33	
大蔵省理事官	戸籍頭	田中 光顕	土佐 29	
大蔵省理事官随員	租税権頭	安場 保和	肥後 37	
同	租税権助	若山 儀一	東京 32	「耕牧事務」取調書類
同	七等出仕	阿部 潜	幕臣 33	「耕牧事務」取調書類
同	同	沖 守固	鳥取 31	
同	租税権大属	富田 命保	幕臣 34	
同	検査大属	杉山 一成	幕臣 29	
英国留学生	従四位	前田 利継	金沢 13	
前田利継随員	金沢県貫属	関沢 明清	金沢 28	
米國留学生	津田仙娘	津田 梅子	東京 6	
(途中参加)				
左院視察官	左院少議官	高崎 正風	薩摩 36	「スタチスク」取調之書類
左院視察官随員	左院少議生	安川 繁成	白川 33	
大蔵省理事官	勸農少属	岩山 敬義	薩摩 32	「耕牧事務」取調書類
大蔵省理事官随員	租税寮七等出仕	由良 守應	公臣 45	「耕牧事務」取調書類
工部省理事官随員		野口 富蔵	会津 30	「蚕業事務」取調書類

(出所) 田中(1994: 222-224)をもとに、留学生および別途出発・途中参加者については各種資料によって補った。

(備考)「参考」欄には、明治8年(1875)3月付けで、太政大臣から提出が命ぜられた報告書名を掲載した。

表3 ウィーン万国博覧会派遣メンバー(一部)

職名	官名	氏名	伝習科目・その他	出身・年齢
副総裁	伊澳兩國弁理公使	佐野 常民		佐賀 52
一級書記官	正院六等出仕	山高 信雄		東京 32
一級事務官	正院六等出仕	関沢 明清	(水産・漁業)	石川 30
同	文部六等出仕	田中 芳男	(博覧会・博物館)	東京 36
同	工部七等出仕	塩田 真		佐賀 37
同	勸工寮七等出仕	佐々木長淳	養蚕法	福井 43
二級事務官	工部技術二等中師	山崎 直胤		大分 22
同		武田 昌次	英国博覧会参加	東京 38
同		富田 淳久	同 上	長崎
同		阪田 春雄	同 上	佐賀 23
三級事務官	事務局十等出仕	緒方 道平	山林諸科	大阪 27
同	事務局十一等出仕	平山成一郎		東京 21
三級事務官心得	事務局御雇	津田 仙	樹芸法	千葉 35
随員	製茶商	松尾 儀助	起立工商会社	佐賀 36
同	糸茶商	円中 文助	製糸	石川 23
同	植木職	内山半右衛門	園庭築造	東京 24
同	同	宮城忠左衛門	園庭築造	東京 39

(随行雇外国人)

列品并物品出取調技術誘導	独	ドクトル・ワグネル	Gottfried Wagener
通弁及編集	独	ヘンリー・ホン・シーボルト	Heinrich Philipp von Siebold
建築	独	グレーベン	G.A. Greeven

(資料) 田中・平山(1897: 附録4-9)をもとに、出身・年齢その他は各種資料によって補った。

る、すべて全一年九ヶ月二十一日の星霜」(久米・田中, 1977: 9)を費やして行われた、右大臣岩倉具視を特命全権大使とし、参議木戸孝允、大蔵卿大

久保利通、工部大輔伊藤博文、外務少輔山口尚芳の4名を副使とする総勢46名の遣米欧使節が、いわゆる岩倉使節団である。岩倉使節一行は、ア

アメリカ合衆国、イギリス、フランス、ベルギー、オランダ、ドイツ、ロシア、デンマーク、スウェーデン、再びドイツ、そしてイタリアを経て、1年半ほどの米欧諸国回覧の後、旅も終わりに近づきつつあった1873年（明治6）6月3日、オーストリア「維納南方の駅」（久米・田中、1980：383）²⁾に到着した。

当時、オーストリア帝国の首府ウィーンでは万国博覧会が開かれていた。大使一行は同月6日の午後から「駕して、東北『プラーテル』苑に至りて、万国博覧会場を回覧」し、さらに9日、14日、16日、17日と計5日間にわたって万博を見学した（久米・田中、1980：393-409）³⁾。ドナウ河畔、プラーターを会場として、1873年5月1日から11月1日まで開催されたこの万博には、欧米諸国を中心に23か国が参加し、出品人員4万2千人、入場者総数722万5千人に達する大規模なものであり、明治政府は総額59万円弱の巨額の国費を費やし、この博覧会に公式に参加した。

表4-1と表4-2は岩倉使節団とウィーン万国博覧会関係の出来事について、本稿の主題に関連する人物を中心に、年表にまとめたものである。「その他」の欄では、岩倉使節団・理事官のメンバーではなく、奥国博覧会の書記官・事務官でもないが、これを契機に大久保利通と接触を持つようになり、やがて内務省勸農政策の展開の中で重要な役割を果たすようになる人々について、関連記事を掲載した。一見しただけでは、各欄の記事相互間の関連性を読みとることは容易ではないが、この表全体の流れを通じて、広義の「勸農」という言葉に集約できるような人脈ネットワーク（図1）が形成された。その人脈ネットワークの中核に位置するのは、大久保利通自身である。

それではどのような形でネットワークの形成が行われたのであろうか。表4-1と表4-2に即しつつ、主要な人物について考察してみよう。まず取り上げたいのは岩山敬義である。

岩山敬義については別に詳しく論じたことがある（友田、2002a；2002b）。岩倉使節団との関連では、まず明治3年（1870）年9月、牧羊に関する建

白書を提出、認められて民部省地理司権少佑准席を申し付けられ、翌4年2月、農事取調御用として3年間米国への派遣を命ぜられた。最初カリフォルニアの牧畜家の下で実地の研究を積んだが、同年12月、岩倉使節のサンフランシスコ到着にともない、使節に同行することになった。ワシントンでは農務省で農政に関する調査に従事、さらにフィラデルフィアその他、各地の農事・牧畜を視察し、翌明治5年（1872）渡英、イングランド、スコットランドで農事・牧畜の視察・実地の研究に励んだ。研究を終えた岩山は、帰途米国で種牛、種羊、種子、農具などを買い入れ、明治6年8月帰国し、間もなく勸業寮における農政官僚の中心となった。内務省期において岩山がとくに力を注いだのは下総牧羊場事業であった。岩山の牧羊に関する建白書が、のちの下総牧羊場事業につながっていくことは言うまでもないが、それはなお漠然としたもので、この建白書の段階では、のち内務省期に下総牧羊場と千住製絨所という形をとって実現する「原毛生産-毛織物生産」の明確なイメージが提供されているわけではない。

ところで、下総牧羊場が薩摩の岩山敬義によって代表されるとするならば、千住製絨所は長州の井上省三によって代表させることができよう。井上省三は、弘化2年（1845）10月、長門厚狭郡宇津井の素封家伯野瀬兵衛の二男として生まれた。同4年毛利家家臣井上半右衛門の養子となり、やがて藩立山口兵学校で蘭学を学んだ。明治3年（1870）6月、木戸孝允に伴われ上京、ドイツ公使館書記のケンペルマンにドイツ語を学び、同年11月伏見満宮（のちの北白川宮）渡欧に随従を申し付けられ、12月横浜を出航した。翌4年2月、ベルリンに到着、最初兵学を学んだが、のち製絨技術の習得に転じ、ザガン市のカール・ウルプリヒト織物工場に入り、技術を修めた。同8年（1875）8月、製絨技術習得の証明を受け、同年10月帰国、帰国後は千住製絨所の創設と運営管理に尽力した⁴⁾。

従って、下総牧羊場-千住製絨所という関係は、人的に見れば岩山敬義-井上省三という関係とし

表 4-1 岩倉使節団およびウィーン万国博覧会関係略年表

年 月	岩倉使節団関係	ウィーン万国博覧会関係	その他
明治 2 年 3. 一			前田正名, 仏国留学生を申し付けられる
明治 3 年 8. 28			品川弥二郎, 桂太郎らとともに, 普仏戦争視察のため横浜を出航
9. 一 12. 3	岩山壮八郎, 牧羊に関する建白書を提出		井上省三, 松野礪ら, 伏見満宮 (のち北白川宮) 渡欧の随行を申し付けられ横浜を出航
明治 4 年 2. 5		オーストリア公使, 沢外務卿にウィーン万国博覧会への参加を要請	
2. 14	岩山壮八郎, 民部省地理司権少佑准席を申し付けられ, 農事取調のため米国への派遣を命ぜられる。渡米の船には池田謙蔵も同船		
2. 18			井上省三, 松野礪ら, 米国・英国を経由してドイツ・ベルリンに到着
10. 7		佐々木長淳, 工部省勸工寮十等出仕に任ぜられる	
11. 5		佐々木長淳, 勸工寮九等出仕	
11. 12	使節団, 横浜発。このとき同じ船で, 関沢明清も加賀藩嗣子前田利嗣の英国留学に随行して渡英		
12. 6	サンフランシスコ着, 岩山壮八郎これを契機に使節団に随行		D.W. アップ・ジョーンズ, 岩倉使節団のサンフランシスコ到着の新聞記事に惹かれ, これが来日の契機となる
12. 14		参議大隈重信・外務大輔寺島宗則・大蔵大輔井上馨, 博覧会事務取扱を命ぜらる	
12. 17	岩山壮八郎, 英国へ転学を命ぜらる。渡英には池田謙蔵も同行		
明治 5 年 1. 一		太政官に博覧会事務局を置く	
1. 10		田中芳男, 澳国博覧会御用掛兼務を仰せ付けられる	
1. 21	ワシントン着		
3. 29		佐々木長淳, 澳国博覧会御用掛を申し付けられる	D.W. アップ・ジョーンズ, 横浜着
4. 10		佐々木長淳, 勸工寮八等出仕	
4. 20		田中芳男, 文部省七等出仕	
5. 3		佐野常民, 博覧会事務取扱を命ぜらる	
5. 25		佐野常民, 博覧会理事官を命ぜらる	
5. 一			アップ・ジョーンズ, 静岡県下で牧場適地調査を実施
6. 22	ワシントン発		
6. 28	ボストン着		
6. 一	由良守應, 牧畜研究として大蔵省理事官随行を仰せ付けられる		
7. 3	ボストン発		
7. 14	ロンドン着		
一. 一			この夏, 井上省三, 岩倉使節団英国に在留中, 転学のことを伺う
8. 25	官費留学生野口富蔵, 工部省理事官随行を仰せ付けられる		
9. 14		田中芳男, 文部省六等出仕	
9. 19		関沢明清, 六等出仕・澳国博覧会御用掛を仰せ付けられる	
10. 19	岩山壮八郎, 大蔵省租税少属に任ぜられる		
10. 27		大隈重信・澳国博覧会事務総裁に, 佐野常民同副総裁に命ぜらる 佐々木長淳, 勸工三等上頭に任ぜられる	
10. 28		関沢明清・田中芳男・佐々木長淳・武昌昌次ら博覧会事務官, 山高信離ら博覧会書記官を申し付けられる	
10. 一			松野礪, エーベルスワルデ高等森林専門学校に入学
11. 1		関沢明清, 博覧会準備のため先行を命ぜられ横浜を出航	
11. 16	ロンドン発, パリ着		
一. 一			この冬, 井上省三, ガザン市の毛織物工場に入る
明治 6 年 1. 17		佐々木長淳, 勸工寮七等出仕	
1. 22		田中芳男, 佐々木長淳, 関沢明清は博覧会一級事務官兼勤, 武昌昌次は同二級事務官兼勤, 緒方道平は同三級事務官兼勤を命ぜられる	
1. 30		博覧会書記官, 事務官, 随行員等, 横浜を出航	
2. 17	パリ発, ブリュッセル着		
2. 24	ブリュッセル発, ハーグ着		
2. 25		佐野常民, ワグネル等, 横浜を出航	

表 4-2 岩倉使節団およびウィーン万国博覧会関係略年表

年 月	岩倉使節団関係	ウィーン万国博覧会関係	その他
明治 6 年			
3. 7	ハーグ発		
3. 9	ベルリン着、鮫島弁務使、青木周蔵・品川弥二郎ほか留学生数十人が駅で出迎え		
3.23		博覧会書記官、事務官、随行員等、ウィーンに到着。二級事務官武昌昌次ら、英国博覧会参加のためトリエステで分かれ、英国に出発	
3.25	野口富蔵、大蔵省十三等出仕に任ぜられる		
3.28	ベルリン発、大久保利通帰朝の途につく		
3.30	ベトログラード着		
3-	大久保帰途バリエに立ち寄り、鹿児島出身留学生の郷友会が開かれる。前田正名これに参加		井上省三、木戸孝允・伊藤博文に謁し、羅紗製造に関する所信を披瀝
4. 5		田中芳男を第 11 区（紙楮類）の審査官副長、津田仙を第 2 区（農林業）第 4 類審査官とする	
4.14	ベトログラード発	佐野常民、ワグネル等、ウィーンに到着	
4.16	木戸孝允帰朝の途につく		
4.18	コペンハーゲン着		
4.23	コペンハーゲン発		
4.29	木戸孝允、ウィーンに到着。5 月初めにかけて万国博覧会を見学		
5. 1	ハンブルク着	博覧会の開場式挙行される	
5. 5		オーストリア皇帝、日本庭園を訪問	
5. 7	ミュンヘン発		
5. 9	フローレンス着		
5.10	フローレンス発		
5.11	ローマ着		
5.26	ローマ発、大久保利通横浜着		
5.27	ヴェニス着、佐々木長淳が出迎え？		
6. 2	ヴェニス発		
6. 3	ウィーン着		
6. 5		岩倉大使、伊藤・山口両副使とともに万国博覧会会場を巡覧	
6. 6	万国博覧会を見学		
6. 9	万国博覧会を見学		
6.16	万国博覧会を見学		
6.17	万国博覧会を見学		
6.18	ウィーン発		
6.19	チューリッヒ着		
6.20	チューリッヒ発、ベルン着		
6.29	ベルン発、ジュネーヴ着		
7.12		関沢明清、病のため帰国の途につく	
7.15	ジュネーヴ発、リヨン着		
7.17	リヨン発		
7.18	マルセイユ着		
7.20	マルセイユ発		
7.23	木戸孝允横浜着	関沢明清、帰国	
8.11	岩山直樹、綿羊・農具・種苗などを携え帰国		
8.18		ウィーンの宮殿で賞牌の授与式挙行	
8.19	岩山直樹、租税大属に任ぜられる		
9.13	横浜着		
9.21		津田仙等、帰国の途につく	
11. 2		万国博覧会閉会	
11. 4		佐々木長淳、グレーベン帰国を命ぜらる	
11.10			内務省設置
11.19		勸工寮廃止。佐々木長淳、製作寮七等出仕	
11.28		武昌昌次、帰国を命ぜられ、ヴェニス出航	
12.31		佐々木長淳帰国	
明治 7 年			
1. 9	岩山直樹、勸業権助に任ぜられ、農務課長を仰せ付けられる		内務省勸業寮設置
1.11		田中芳男等、ウィーンを出発	
1.31		佐々木長淳、勸業寮七等出仕	
3. 7		田中芳男帰国	
4. -			井上省三、留学期間満了のため海外留学を免ぜられるが、自費をもって留学を継続
6. -			文部省留学生を整理。前田正名はそのまま滞仏
8. 8		田中芳男、勸業寮六等出仕に兼補	
10.21		佐野常民、ワグネル等、ウィーンを出発	
11. -		緒方道平、帰国	
12.27		佐野常民、ワグネル等、横浜着	
明治 8 年 この年		関沢明清、勸業寮六等出仕 緒方道平、内務省地理寮九等出仕に任ぜられ山林課に勤務	前田正名、外務省二等書記生・仏国公使館在勤となる。このころより仏国農商務省に出入りする松野礪帰国、内務省地理寮雇となる 井上省三、製絨技術習得の証明を受け、帰国の勸業寮雇

（出所）「岩倉使節団関係」については主に田中（1994）など、「ウィーン万国博覧会関係」については主に田中・平山（1897）など、また「その他」については木代（1938）、祖田（1973）などによった。

と見ることができるが、その関係はどのようにして形成されたのであろうか。これに関して興味深いのが、大倉喜八郎の「大久保公と毛織事業」(侯爵大久保家蔵版, 1929: 19-24) という談話である。大倉によれば、明治6年(1873)、当時パリに滞在していた大久保利通・木戸孝允と面会した際に、大久保から欧州視察の目的について訊かれ、羅紗製造に関する取り調べであると答えたところ、大久保はこれに賛意を表しながらも、「先づ試みに毛織事業を政府の力で着手して相当の成績を収め事業に見込がある様になれば貴公の手に払下げる事にしては如何や」とのことで、さらに大久保から、毛織事業はなかなか難しいものなので「織物の研究には木戸公の選抜で長州の学生井上省三又羊の研究には吾輩(大久保)の薩州の岩山敬義と云ふ人物を選び井上は独逸の『ケムニチ』の織物を調査研究し岩山は米国の牧場に就いて綿羊飼育の方法を研究する事になった」と言う話があったとしている。この談話では、大倉の話を契機として初めて、井上にドイツで製絨について、また岩山に米国で牧羊について研究をさせることになったと読めるが、それ自体は誤りである。岩山がすでに明治3年(1870)の時点で牧羊に関する建白を行い、翌年から米国で牧畜の研究に従事していたのは既述のごとくであるし、井上についても、すでに明治5年夏頃、当初の志望であった兵学研究に不満をおぼえ、民間での産業振興に資するため「大使英国在留中竊ニ転学之義相伺」い、さらに同年冬から友人の親戚(木代, 1938: 65-67)の「羅紗製造局」(ザガン市カール・ウルプリヒト織物工場)に入り学んでいるからである。

ただし、大倉の談話そのものは誤りであるとしても、牧羊事業と製絨事業が結びつき、それぞれが下総牧羊場・千住製絨所へと具体化していく契機となったのは、やはりこの岩倉使節団であったと考えられる。井上の書簡には、ドイツ滞留中の木戸孝允・伊藤博文らに「私之開国論ヲ陳述スルニ大ニ其同意ヲ得」(木代, 1938: 67)とあるが、岩倉使節のドイツ滞在は明治6年(1873)3月であるから、このころから木戸・伊藤らを通じて、大久

保-岩山ラインの牧羊事業と井上の製絨事業が結びついていくと考えて良いであろう。

なお、井上省三の転学にはもう一つの説がある。青木周蔵の説である。青木の自伝によれば、当時ベルリンに来ていた北白川宮一行に、兵学から他の学科への転学を説いたところ、第一に賛意を表したのが井上省三であったので、井上に対して「日本の陸海軍は将来多量の羅紗を需要すべきは勿論、一般人民も亦羅紗を使用するの時機来るべし。左れば、今に於て羅紗製織の方法を修得するは国家経済上一大利益なりとの理由を以て、羅紗製織の方法を研究すべし」と勧告し、また井上が羅紗製織の方法を修得し終わったあと、「其の帰国に際しては一封の紹介状を大久保〔利通〕内務卿に寄せ、同氏の経歴を述べ、且、同氏を主幹として羅紗製織所を起さんことを建議した」というのである(坂根, 1970: 29-32)。この青木説については、青木の自伝以外にこれを証明する資料が存在せず、『井上省三伝』などによれば、井上の転学は自主的なものであったと考えざるをえない。

ところで、青木の自伝では、同じく伏見満宮に随従して、留学生となった松野礪にも「森林経営の国家経済上重大なる関係あることを説明して、林学を修めんことを慫慂」(坂根, 1970: 31)したと述べている。松野の回顧(成川, 1931: 435-444)によれば、井上の場合とは異なり、林学への転学が青木の薦めによったことは間違いないようである⁵⁾。

松野礪は、弘化4年(1847)3月、長門美弥郡太田村に大野大作の二男として生まれた⁶⁾。坪井信道に蘭学を学び、のちに脱藩して松野姓を名乗った。明治2年(1869)上京し、医学を伊東方成に学び、また開成学校御雇教師カトリル、公使館通訳のスイス人ケンペルマン(ケンペルマンか?)からドイツ語を学んだ。井上省三と同じく、翌3年伏見満宮に従って渡欧、ドイツでは最初国家経済学を志したが、のち林学に転学、ハルツブルクで森林官シュライベル、ウィンカエルホーフから林学の初歩を教わり、同5年10月からエーベルスワルデの高等森林学校に入学、明治8年(1875)6月

全科を修了、帰国した。帰国後は山林行政に携わり、また東京山林学校の創設に尽力し、初代校長となった⁷⁾。

井上省三も松野礒も、木戸孝允-青木周蔵のラインで結びつく長州閥であったが、井上が大久保利通に起用され千住製絨所を通じて内務省勸業政策に係わっていったのと同様に、松野もまた木戸の幹旋とそれを受け入れた大久保により、内務省に地位を得て、山林行政に携わることができたのである。松野はこれについて、「先に(岩倉使節が来た際に)独逸に於て開陳したる林業の必要論は、幸に大久保内務卿の容るゝ所となつて、卿が帰朝せられると内務省地理寮内に、木石課を設け(中略)續て之を山林課と改めた。余は帰朝するや直に卿に召出され、八月二十八日地理寮雇を命ぜられ、月俸七十円を給せられた」(成川, 1931: 439)と述べている。

なおちなみに、松野礒は大日本山林会の創設に尽力するが、明治15年(1882)1月同会が設立されたときの幹事長が品川弥二郎である。品川は、松野や井上がドイツ留学当時、青木と並んで留学生たちの中心的な存在で、森川潤氏のいわゆる「ドイツ・コネクション」(森川, 1997)の中核的人物の一人であった。やがて、松方正義の後を継いで勸農局長となり、さらに農商務省創設とともに農商務少輔となり、農政の前面に登場してくるが、これは後日の話である。

ところで、青木の自伝は松野礒に関して、「松野氏は是れに由て日本に西洋主義を基礎とする林学を輸入せる第一人となれり」(坂根, 1970: 32)と述べているが、近代林学・林政導入の功績を松野一人に帰すような見解には大きな問題がある。松野と並んで、近代林学・林政導入に大きな役割を果たした人物として緒方道平がいるからである。幕末期に蘭学を学んだ緒方道平は、ウィーン万国博覧会開催にともなう、明治5年(1872)11月博覧会事務局雇となり、同6年1月には博覧会事務局十等出仕として博覧会三級事務官に任ぜられ渡澳、独語通弁列品所詰の任に当たった。博覧会閉会後、佐野常民から山林事業伝習を命ぜられ、

オーストリアのマリアブルン山林大学校に入り、マルヘット、エキゼゼル、などについて植樹法、伐採法、森林法及木材学を学び、また飼草撰種法を伝習した。さらにエキゼゼル氏に従ってバイエルン、ザルツブルク、ダッハウ地方を巡回してその実況を視察し、農務省ではミクリツゝ氏によって農務省の制規および事務管理の実況を研究し、同7年11月帰朝、翌8年8月から内務省地理寮に出仕し、林政に尽力した⁸⁾。このように緒方道平は、ドイツ留学生であった松野礒とは異なり、澳国博覧会事務官であったが、同じ事務官として緒方より上位の一級事務官であったのが佐々木長淳である。

幕末期に福井藩の藩政改革で大きな役割を果たした佐々木長淳は、廃藩置県後上京、明治4年(1871)10月工部省勸工寮十等出仕、翌11月には同九等出仕に任ぜられた。同5年3月澳国博覧会御用掛、10月同一級事務官を申し付けられ、ウィーンで博覧会事務に従事した。他方、イタリアの生糸会社、パドワの蚕事学校、製糸場、養蚕家、スイスの屑糸紡績場、紡績機械製造所などで視察・調査を行い、オーストリア・ゴルツの「蚕事学校」でボルレーについて養蚕関係の伝習を受けた。この間、勸工寮七等出仕、製作寮七等出仕に補せられている。明治末における佐々木の回想によれば、「私が初めて公にお目に懸つたのは、オーストリアの博覧会の時であつた。明治六年の一月に佐野常民伯と同道してオーストリアの博覧会に行つた。其時は工部省の七等出仕であつたが、オーストリア博覧会一等出仕として行つたのである。博覧会の事が略終ると、今度は養蚕製糸紡績、此の三ツを取調べるといふ工部省の命令で、先づオーストリアで此等を調べ、後に伊太利へ行つて、此の三ツを調べて居た。さうして居ると、岩倉大使が大久保木戸等の副使を随へて伊太利へ来られ、ベニスに泊られる事になつた。私はベニスの停車場へ迎ひに出て旅館へも同道して御挨拶を申し上げたが、此が公にお目に懸る始めて、而も欧羅巴では、此の時唯だ一回お目に懸つたきりであつた」(佐々木, 1912: 77-78)という。岩倉使

節団がベニスに到着したのは明治6年(1873)5月27日、途中で岩倉使節団と分かれた大久保利通はその前日の5月26日には横浜に着いているから、佐々木の回想は信憑性が乏しいが、「伊太利で一才お目に懸つた時に大久保公のお眼鏡に叶つたものらしい」(同上:79)とも述べているように、実際の場所はともかく、岩倉使節団の滞欧中に佐々木が大久保と初めて出会った可能性は少なくない。いずれにせよ、佐々木は明治6年12月に帰国し、翌7年1月内務省勸業寮七等出仕となり、「(大久保)公からは色々建議をしると言はれて盛に建議をしたが、大抵用ゐられ」(同上:79-80)、とくに新町紡績所(屑糸紡績)の創設など養蚕・製糸の分野で大きな功績を遺した⁹⁾。

佐々木長淳と同じ博覧会一級事務官に関沢明清がいる。関沢明清は天保14年(1843)2月、加賀藩士関沢六左衛門房清の二男として金沢に生まれた。江戸で江川太郎左衛門、村田蔵六に蘭学を学び、慶応2年(1866)藩の軍艦軍用頭取として長崎に赴き、さらに選ばれて英国留学を命ぜられた。ロンドンで学び、滞英3年ののち、明治元年(1868)帰国した。明治4年(1871)11月、岩倉使節団に同行して留学する旧藩主の嗣子、前田利嗣に随行して再度英国に渡った。同5年9月正院六等出仕・澳国博覧会御用掛となり、翌10月博覧会事務官を申し付けられ、11月出品の準備・打ち合わせのため他の事務官等に先だつてオーストリアに渡航した。ウィーン万国博覧会では「外人応接兼貿易取調」(田中・平山, 1897:「附録」4)を担当したが、関沢が目にしたのは水産・漁業であった。関沢がのちに著した「澳国博覧会後に於ける本邦の水産業」(同上:「下篇技術伝習」195-206)では「(澳国)博覧会ありて予は事務官として派遣せられしとき各国より出陳せる物品星羅森列の中其水産に属する者は他の割合に多からざりしと雖も其養魚の方法の規模宏大なる漁業制度の用意周到なるが如き実に予が窺見せし所にして驚歎の余殆んど人をして喁然たらしめたりき然れども予は当時事故あり此等の事を研究するに及ばずして帰朝」したと述べている。この回想にもあるように、関沢は

滞澳中に病気にかかったため、深い研究を行う機会をもてないまま帰国した。従って、関沢が水産の問題に本格的にかかわるのは、明治8年(1875)開催の米国フィラデルフィア万国博覧会に事務官として参加してからであったが、水産問題に目を見開かされた発端がウィーン万国博覧会であったことは重要である。帰国後はわが国水産行政の第一人者として活躍した¹⁰⁾。

さらにもう一人の博覧会一級事務官田中芳男は、博物学者として著名で、伝記的研究その他¹¹⁾も豊富なので経歴等は省略するが、ウィーン万国博覧会後も博覧会行政をはじめ、農林水産業の各分野で要職を歴任し活躍した。なお、農政官僚ではないため本稿では触れないが、三級事務官心得の津田仙がメンバーに加わる契機について、その唯一の伝記でも「もともと農業関係の人として知られていたもので、その部門からの詮衡により」(都田, 1972:40)加えられたと記されているだけだが、田中芳男は慶応元年(1865)頃のこととして「其時津田仙君とは至つて心易かつたから、津田君かいろいろ誘導して下さい、又植物栽培に付ても津田君と打合せてやつたことがあります」と述べており、田中芳男の推薦という可能性が高い。

ところで田中芳男の経歴がよく知られているのと対照的に、勸業寮では重要な役割を果たしたと思われるにもかかわらず、経歴がよくわからないのが博覧会二級事務官の武田昌次である。表3にもあるように、武田は博覧会事務官とは言っても英国博覧会の担当であり、ウィーン万国博覧会の事務官ではないため、『澳国博覧会参同記要』の「人員表」にも名前が見られない。ちなみに、英国博覧会とは英国経常博覧会と呼ばれるもので、明治6年(1873)5月から10月まで、ロンドンのサウスケンジントンを会場とし、日本からも陶磁器、七宝、漆器などを出品したこと程度しか明らかになっていない(山本, 1973:245)。「澳国博覧会ノ際ニ乗ジ(澳国博覧会)事務局特ニ之ヲ編成」した一覧図説が『教草』であり、武田昌次は全30葉のうち、「からむししらへかた苧麻製法一覽」「いとにせいするそうもく製糸草木一覽」「うるししらへかた漆製法一覽」「ろうししらへかた蠟製法一覽」「油一覽」「べに

一覧」「^{くずこ}澱粉一覧」「^{こんやく}郷腐一覧」「豆腐一覧」の9葉について、述者・撰者・抄録者などとして係わっているが、復刻版の解説者吉田光邦氏も武田昌次については、ほとんど何も明らかにしていない(吉田, 1980: 3-18)。なお、帰国後については、明治11年(1878)1月田中芳男の建議により小笠原島事務係をおき、武田昌次が事務に当たったこと、同年3月小笠原島に移植する植物調査のため一等属武田昌次を委員としてインド・ジャワに派遣したことなどがわかっている。明治13年(1880)には勸農局一等属兼会計局一等属・小笠原島内務省出張所在勤一等属であったが、同年10月小笠原諸島は東京府に移管され、これにともなって武田は東京府一等属・小笠原島出張所詰となった。明治16年(1883)以降については定かでない。

澳国博覧会事務官で重要な人物としては、このほかに一級書記官山高信離、二級事務官阪田春雄などがいるが、いずれも活躍の分野は主に博覧会関係でなので、ここではこれ以上触れない。また、岩山敬義以外の岩倉使節団関係者で、農政に関する調査や報告を行った人物として、表2の中では阿部潜、沖守固、高崎正風、由良守應、野口富蔵が重要であるが、帰国後は勸農政策の分野にはほとんど係わっておらず、またその略歴についてはすでに拙稿(友田, 1996; 1997)で紹介したことがあるので、これを参照されたい。なお、大蔵省理事官随員の杉山一成は、幕府の先手組与力、精鋭隊取締役で、明治維新後、徳川慶喜の静岡移住に随従した。田中顕光理事官随行として岩倉使節団に係わり、帰国後は勸業寮七等出仕となっているが、勸業寮が勸農局に再編された際には会計局権少書記官に移り、また岩倉使節団大蔵省理事官随行でも「会計専務」となっていたことからわかるように、いわゆる会計官で勸農実務に携わった農政官僚とは言えない。杉山は明治13年(1880)3月17日、肺病で病没している。

最後に岩倉使節団の直接の関係者でもなければ、澳国博覧会事務官などのメンバーでもないが、岩倉使節団のフランス訪問を契機に、のちに内務省勸農政策に係わり、やがてその展開にとつ

て重要な役割を果たすことになる人物として前田正名を挙げておく。前田については伝記、その他多くの研究論文等が著されているので¹²⁾、ここでは前田が勸農政策に係わるようになった契機についてだけ略述しておきたい。祖田修氏によれば、前田正名は明治2年(1869)、大久保利通・大隈重信の配慮で大学校より留学生の指名を受け、同年6月頃コント＝モンブランに随行してフランスに渡ったとしているが、日本史籍協会編(1997: 408-410)および我部・広瀬(1995: 452-460)によれば「仏国博覧会御用ニ付御傭人我領事館コントモンブランへ随行仏国派出」を申し付けられたのが明治元年(1868)12月、「仏国留学生」を申し付けられたのが同2年3月であった。フランスでは普仏戦争、パリ＝コンミュンという激動の時代を身をもって体験したが、その詳細については不明な点が多い。やがて明治6年(1873)、岩倉使節団が欧米を訪問し、各地を巡歴したが、「帰途大久保は再びパリに立ち寄り、その機会に鹿児島出身の留学生たちが、郊外の景勝地サンゼルマンにおいて三月末郷友会を開いた」(祖田, 1973: 47)。このとき集まった中に前田正名がいる。祖田氏は岩倉使節米欧回覧中における大久保利通と前田正名の直接の接触については、この程度しか触れていないが、後年の新町紡績所に関連する前田正名の談話によれば、「明治六年故人大久保公全権副使として仏国巡回中里昂^{リオン}に於ける絹糸紡績工場を視察せられた際、余は留学中で通訳の為随行した」(石神, 1938: 332)とあり、途中で岩倉使節団と分かれた大久保がリオンを通るとすれば、パリ再訪のあと、マリセーユへの途次と考えられるから、6年4月頃のことであろう。同年12月、前田は海外留学を免ぜられたが、そのまま滞仏し、8年6月には二等書記生に任ぜられ、仏国公使館在勤を申し付けられた。「仏国農商務省につき農商工業の取調に従事した」(勝田, 1928: 175)のがこのころのことで、やがてパリ万国博覧会を契機に内務省勸農政策に係わっていくことになるのである。

IV. おわりに

内務省期における勸農政策推進の担い手となったのは、勸農担当部局の最上層を構成する農政実務官僚である。彼らは、上は初代内務卿大久保利通を頂点に、下はそれぞれの人脈に基づいて手足となって政策を遂行する中下級官僚を包含した一大ネットワークを形成し、勸農政策を推し進めていった。そして、このネットワーク形成の最大の契機となったのが、岩倉使節団の米欧回覧と、

ウィーン万国博覧会への日本政府の公式参加という、相互に関連しあう二つの画期的なイベントであった。本稿では、とくに最上層の農政実務官僚たちに焦点をあて、彼らによるネットワークがいかにして形成されていったのかについて明らかにした。次に問題となるのは、こうして形成された農政実務官僚たちのネットワークが、どのようにして勸農政策を遂行し、どのような成果を近代日本における農政史上に遺していったのかである。稿を改めて考察したい。

注

- 1) ここでは、内務省勸業寮(のち勸農局)で、農業(養蚕・畜産を含む)および水産業関係の行政に携わった官僚に加え、地理寮(のち地理局)で山林行政に携わった官僚をも含めて農政官僚と呼ぶことにしたい。のちの農商務省の農林水産関係官僚に相当する。
- 2) 岩倉使節一行といっても全員ではなく、副使の木戸孝允は同じく副使の大久保利通とともに使節に先だって帰国の命をうけたため、岩倉らよりも早く4月29日ウィーンに到着し、5月初めに博覧会を見学しているし、大久保はこのころすでに日本に帰国していた(日本史籍協会, 1985: 354-360)。
- 3) 田中・平山(1897: 上篇41)によれば「六月一日岩倉全権大使ノ一行澳国ニ着シ同五大使ハ伊藤(博文)山口(尚芳)ノ兩副使ト共ニ会場ヲ巡覽セラレタリ」とある。
- 4) 井上省三については、木代(1938)が詳しい。なお『大日本織物協会報告』第10号(大日本織物協会, 1887)には「故井上省三君之肖像」と「故井上省三君の略伝」が掲載されているが、『同上誌』第3号(1886)51-54頁に掲載された「動物繊維即獣毛の説」と第5号(1886)93-95頁収録の「印度地方花綿工業の景況」は井上省三の数少ない論考である。
- 5) 松野と同じく、青木周蔵の薦めによってビール醸造に取り組み、帰国後、開拓使麦酒醸造所の創設にあたった人物に中川清兵衛がいる。中川については子孫による伝記(菊池・柳井, 1977)があるが、滞独中に関する記述はほとんどが青木の自伝によっている。
- 6) 旧説では大野徳右衛門の4男とされていたが、池田(1986: 19-23)は、徳右衛門は祖父で、父は大作であることを考証している。
- 7) 以上松野礪については、主に成川(1931: 435-444)、田中(1962: 1-33)によった。このほか、松野と林学を論じた論文に、小林(1992: 7-9)、飯塚(1999: 43-50)がある。
- 8) 緒方道平の経歴と業績については、長池(1975a: 16-25; 1975b: 11-17)、友田(1999a: 25-38)などを参照されたい。
- 9) 佐々木長淳の経歴と業績については、取り敢えず友田(2002d: 1-16; 2005: 100-107)を参照されたい。
- 10) 関沢明清の経歴と業績については、大日本水産会(1897a; 1897b)によった。研究としては、吉原(1976: 17-144)が詳しい。このほかにも、下(1932: 2-6)、田村(1944: 20-53)、岡本(1969: 27-30)、大日本水産会(1982: 75-78)、佐藤(1986: 63-69)などが参考になる。なお、小説ではあるが和田(1994)はよく史実に即して興味深い。
- 11) まとまった伝記的研究・資料集としては、小泉(1914)、村沢(1978)、みやじま(1983)、田中(2000)がある。また「田中芳男君七六展覧会の砌同君の演述されたる所に係る」経歴談として田中(1913-14)が、博物館の企画展図録には飯田市美術博物館(1999)がある。さらに、論文・評伝では主なものとして、水野(1970: 9-14)、奥本(1985: 529-537)、磯野(1995: 27-42)、橋詰(1997: 61-68)、長沼(1997: 3-18・3-16)、角山(1998: 329-362)などをはじめ多数の研究がある。
- 12) 伝記的研究としては、とりあえず祖田(1973)だけを挙げておきたい。この他、モノグラフィーは極めて多数あるが、いずれも主に『興業意見』や府県農事調査、また地方産業運動、全国農事会運動を主題としたもので、フランス留学時代について詳しく論じたものを見ない。

引用・参考文献

- 飯田市美術博物館編（1999）『日本の博物館の父 田中芳男展』飯田市美術博物館。
- 飯塚 寛（1999）「松野圃と志賀泰山」『森林計画誌』森林計画学会，第 32 号，43-50。
- 池田善文（1986）「大田大野家と松野圃について」『温故知新』美東町文化研究会，第 13 号，19-23。
- 石神今太（1938）『甲東先生逸話』鹿児島県教育会。
- 磯野直秀（1995）「田中芳男の貼り交ぜ帖と雑録集」『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』慶應義塾大学日吉紀要・自然科学刊行委員会，第 18 号，27-42。
- 岡本信男（1969）『水産人物百年史』水産社。
- 奥本大三郎（1985）「虫捕御用のパリ万博—博物学者田中芳男小伝」『中央公論』中央公論社，第 100 巻第 12 号，529-537。
- 勝田孫弥（1928）『甲東逸話』富山房。
- 我部政男・広瀬順昭編（1995）『国立公文書館蔵 勅奏任官履歴原書 下巻』柏書房。
- 菊池武男・柳井佐喜（1977）『中川清兵衛伝』八潮出版社。
- 木代修一（1938）『井上省三伝』井上省三記念事業委員会。
- 久米邦武編・田中彰校注（1977）『特命全権大使米欧回覧実記（一）』岩波書店。
- 久米邦武編・田中彰校注（1980）『特命全権大使米欧回覧実記（四）』岩波書店。
- 侯爵大久保家蔵版（1929）『大久保利通文書 第 9』日本史籍協会。
- 小泉三男松（1914）『田中芳男氏功績書』私家版。
- 小林富士雄（1992）「日本近代林学揺籃の地を訪ねて—エーベルスワルドと松野圃—」『林業技術』日本林業技術協会，第 608 号，7-9。
- 坂根義久校注（1970）『青木周蔵自伝』平凡社。
- 佐々木長淳（1912）「殖産興業」松原致遠『大久保利通』新潮社，77-86。2003 年，マツノ書店より復刻。
- 佐藤重勝（1986）『サケ—つくる漁業への挑戦』岩波書店。
- 下 啓助（1932）『明治大正水産回顧録』東京水産新聞社。
- 祖田 修（1973）『前田正名』吉川弘文館。
- 大日本水産会（1897a）「関沢明清氏逝く」『大日本水産会報』大日本水産会事務所，第 175 号，50-51。
- 大日本水産会（1897b）「関沢明清君の伝」『大日本水産会報』大日本水産会事務所，第 177-179 号，33-38，235-239，316-318。
- 大日本水産会（1982）『大日本水産会百年史』大日本水産会。
- 田中 彰（1994）『岩倉使節団「米欧回覧実記」』岩波書店。
- 田中波慈女（1962）「松野圃先生」『林業先人伝』日本林業技術協会。
- 田中芳男（1913-14）「田中芳男君の学歴と産業上の啓導」『大日本農会報』大日本農会事務所，第 389 号-394 号，62-65，90-94，79-83，83-87，76-80。
- 田中芳男・平山成信編（1897）『澳国博覧会参同記要』森山春雍。
- 田中義信（2000）『田中芳男十話・田中芳男経歴談』田中芳男を知る会。
- 田村栄太郎（1944）『日本の産業指導者』国民図書刊行会。
- 角山幸洋（1998）「佐野常民と田中芳男—幕末明治期のある官僚の行動—」『経済論集』関西大学経済学会，第 48 巻第 3 号，329-362。
- 友田清彦（1996）「岩倉使節理事官『理事功程』と日本農業（1）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会，第 83 号，40-52。
- 友田清彦（1997）「岩倉使節理事官『理事功程』と日本農業（2）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会，第 84 号，37-49。
- 友田清彦（1999a）「ウィーン万国博覧会と日本農業（上）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会，第 88 号，25-38。
- 友田清彦（1999b）「ウィーン万国博覧会と日本農業（下）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会，第 89 号，13-27。
- 友田清彦（2002a）「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場（1）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会，第 94 号，15-26。
- 友田清彦（2002b）「農政実務官僚岩山敬義と下総牧羊場（2）」『農村研究』東京農業大学農業経済学会，第 95 号，78-90。
- 友田清彦（2002c）「内務省勸農政策の展開と農政実務官僚」『2002 年度 日本農業経済学会論文集』日本農業経済学会，66-71。
- 友田清彦（2002d）「ウィーン万国博覧会と日本における蚕業技術教育—佐々木長淳の『蚕事学校』構想を中心に—」『技術と文明』日本産業技術史学会，第 24 冊 13 巻 1 号，1-16。

- 友田清彦(2005)「資料 明治の蚕業指導者佐々木長淳と『蚕事学校』構想」『農村研究』東京農業大学農業経済学会, 第101号, 100-107。
- 長池敏弘(1975a)「松野礒と緒方道平—明治林政創成期における二人の役割—(上)」『林業経済』林業経済研究所, 第28巻第10号, 16-25。
- 長池敏弘(1975b)「松野礒と緒方道平—明治林政創成期における二人の役割—(下)」『林業経済』林業経済研究所, 第28巻第11号, 11-17。
- 長沼雅子(1997)「田中芳男『博覧会日記全』(一)(二)」『伊那』伊那史学会, 第45巻第3号, 第5号, 3-18, 3-16。
- 成川房幸(1931)「故松野礒先生の譚」『明治林業逸史 続編』大日本山林会。
- 日本史籍協会編(1985)『木戸孝允日記(二)』東京大学出版会。
- 日本史籍協会編(1997)『百官履歴 二』北泉社。
- 農務局(1881)『勸農局沿革録』農務局。
- 橋詰文彦(1997)「田中芳男と万国博覧会—明治期における実務官僚の役割—」『研究紀要』長野県歴史館, 第3号, 61-68。
- 水野都生(1970)「博物学史に欠くことのできぬ飯田出身の田中芳男男爵」『伊那』伊那史学会, 第18巻第6号, 9-14。
- 都田豊三郎(1972)『津田仙—明治の基督者—』私家版。
- みやじましげる(1983)『田中芳男傳—なんじゃあもんじゃあ—』田中芳男・義廉顕彰会。
- 村沢武夫(1978)『近代日本を築いた田中芳男と義廉』田中芳男義廉顕彰会。
- 森川 潤(1997)『ドイツ文化の移植基盤—幕末・明治初期ドイツ・ヴィッセンシャフトの研究—』雄松堂出版。
- 山本光雄(1973)『日本博覧会史』理想社。
- 吉田光邦(1980)「解説『教草』の周辺」『復刻 教草』つかさ書房。
- 吉原友吉(1976)「南房総の捕鯨」『東京水産大学論集』東京水産大学, 第11号, 17-144。
- 和田頼太(1944)『鮭と鯨と日本人—関沢明清の生涯—』成山堂書店。

(受付 2006 年 11 月 14 日)
(受理 2007 年 1 月 11 日)

Formation of Networks of Secretarial Bureaucrats of Agricultural Ministry During the Period of Naimusho (Home Ministry)

Kiyohiko TOMODA (Tokyo University of Agriculture)

Full-fledged expansion of the agricultural policies in Japan in the modern age was started by inauguration of the Naimusho and by settling of an industry promotion division in the said ministry. Most of the bureaucrats forming the highest hierarchy among the secretarial bureaucrats who were competent enough to support the expansion of the agricultural policies were the people who were directly related to the circulating tour of Iwakura Mission carried out in the period ranging from 1871 to 1873 and the events of World Exposition in Vienna, Austria of 1873. Major governmental officials included Iwayama Keigi, Tanaka Yoshio, Sasaki Chojun, Ikeda Kenzo, Sekizawa Akekiyo, Maeda Masana and Inoue Seizo. It should emphatically be stated that their human-relational networks acted to promote the power of the agricultural policy expansion in the period of the Naimusho. The focus in this paper is on the secretarial bureaucrats of agricultural policy in the Home Ministry, and it is explained how the human-relational network, with Ohkubo Toshimichi as a pivotal figure, came to be formed.

Key words : Agricultural Policy in Meiji Era, Secretarial Bureaucrats of Agricultural Policy Ministry, Iwakura Mission, World Exposition in Vienna